

# カムイヤキ

「まいコレ」では、収蔵庫に眠るイチ押し<sup>い</sup>の出土品を、月替わりでご紹介。今月は、グスク時代の代表的な遺物として知られるカムイヤキです。

## ■ 出土地：普天間後原第二遺跡

普天間<sup>ふてんま</sup>後原<sup>くしばる</sup>第二遺跡から出土したカムイヤキは、口縁は大きく外反し口唇部の断面は三角形状を呈<sup>てい</sup>しています。内外面ともに指ナデによる口調整の痕跡が見られますが、内面には格子目状の叩きも残っています。文様は肩部に波状文<sup>はじょうもん</sup>が施<sup>ほどこ</sup>されています。胎土は石英<sup>たいど</sup>や石灰質<sup>せきえい</sup>の砂粒を含む暗灰色で、芯は褐色<sup>かつしよく</sup>です。このカムイヤキは、底部から口縁部まで残っていたので復元することができました。

カムイヤキは、11～14世紀に徳之島<sup>とくのしま</sup>で生産された焼物のことで、グスク時代に琉球列島全域に普及しました。また、長崎産の滑石製石鍋<sup>かつせきせいしなべ</sup>や中国産白磁<sup>はくじ</sup>、炭化した稲や麦などと一緒に見つかることから、当時の交易や稲作などの初期農耕との関連性を窺<sup>うかが</sup>うことができます。



復元前のカムイヤキ



肩部分の復元作業状況